

徳島読書人が選ぶ
最高の**31**冊

ページをめくるたび、
読みたくなる本が増える！？

徳島大学の教職員、学生、図書館員、社会人など様々な世代、グループの人が集い、ぜひ読んでもらいたい最高のお薦め本を選びました。熱い気持ちのこもった推薦文を手がかりに、新たな本との出会いへ、いざ出発！

家守綺譚



梨木香歩著

新潮社（新潮文庫）2006



身の回りの細かいところの変化を楽しむことができる人は素晴らしいと思います。例えばいつも通る道の片隅に一輪の花が咲いているのを発見したり、夜空を見上げて先日とは異なる星の様子に感動したり。

私は週に数回散歩に出かけます。散歩をただ歩くだけの行為と捉えるならつまらないものと感じるでしょうが、私は小さな冒険の一つと考えております。本書の舞台は都会とは言い難い自然に満ち溢れた場所ですが、都会の中を一人ぶらぶら歩くだけでも、目を凝らせば変化というものが見え隠れしております。それを見つけたときのちょっとした優越感、達成感他所では中々味わえないものです。この本を一言で纏めると、綿貫征四郎という新米作家の、周囲の自然との交歓の記録といったところでしょうか。普段あまり散歩をされないという方、この本を一読して、軽く近所の公園等をぶらついてみては如何でしょうか。きっと、今までにはなかった見え方をする筈です。（学生：男）

美しき日本の残像



アレックス・カー著

朝日新聞出版（朝日文庫）2000



アメリカ人が日本語で書いたエッセイ集。一種の「日本論」ですが、伝統の退廃、自然破壊なども指摘しています。アレックス・カーは大学で日本学と中国学を学び、日本で貿易や不動産の仕事もしてきました人です。

1973年、21歳のとき日本全国を旅して回り、最後に徳島・祖谷にたどり着きます。この地は開発の汚染を免れていると感じた彼は、空き家になっていた民家を買取り、地元の人とともに苦労して茅葺屋根を葺き替えました。彼はここに、幼い頃から夢見てきた「城」を見つけたのです。

祖谷の自然は特別であると同時に、そこに住む人々も特別で、優しく素直でした。「日本で一番美しい山は四国の祖谷溪」とも述べています。しかし、彼はやがてここ四国にも「汚染」の波が徐々に押し寄せていると感じ、山からおりていきます……。愛してやまぬ日本の美しさが今や失われつつある、という危機感が書かせた作品、まずは徳島の人を読むべき本だと思います。

（社会人：男）

陰翳礼讃

※ 青空文庫あり



谷崎潤一郎著

中央公論新社（中公文庫）1995



この本が書かれたのは、電気の明かりが定着しつつあった昭和8年頃のことです。

本文の始まりは、電灯やガスといった最新技術がどうにもこうにも日本家屋に合わない、という著者の嘆きから。そして、煌々と明るく照らされた座敷に感じる違和感の正体とは、今まで身近にあった暗闇がないことだとひらめくのです。『思うに西洋人のいう「東洋の神秘」とは、かくのごとき暗がりを持つ不気味な静けさを指すのであろう。』と。そして、日本文化に根付く陰影の魔法について、建築や食文化、芸能、はては女性の美しさについてまで、幅広く書かれていくのです。

このあらすじからは難しい本に感じるかもしれませんが、そんなことはありません。なぜなら、筆者が最初に解き明かす陰影の魔法がなんと廁にあるからです。「え、廁？」と思った方はぜひご一読を！暗闇と日本文化の結び付きについて、ユーモアと少しの愚痴を交えて書かれた日本文学の傑作です。（社会人：女）



おんなのことは

茨木のり子著

童話屋（童話屋の詩文庫）1994



茨木のり子（1926～2006）の6冊の詩集から選ばれた35編のアンソロジーです。「いい詩には、ひとの心を解き放ってくれる力があります。」という茨木の言葉通り、この詩集には励ましてくれる優しさ、叱咤する厳しさがあり、ふと立ち止まって考える時間を与えてくれる不思議な力が込められています。

読み手の心の中に抵抗なく、スッと入って来て、素直な気持ちにしてくれる自然な言葉づかいが心地よいのです。

持ち運びに嵩張らず、いつも身近に置いて繰り返し読むことの出来る「手のひらサイズ」が嬉しく、物事がうまくはかどらない時、神経がささくれ立っている時、落ち込んでなかなか立ち直れない時などに、そっと取り出すのもいいかも知れません。

『おんなのことは』と題されてはいますが、勿論男性にも有効です。茨木の言葉の瑞々しさに惹かれ、この35編を選んだのは他でもない男性なのですから……。 （社会人：女）

新編 風の又三郎



宮沢賢治著
新潮社（新潮文庫）1989



「どっどど どどうど どどうど どどうど」これは童話作家・宮沢賢治の表現した風の音です。彼の文章はやわらかく簡潔で、描写が美しく、読み進めるとその情景がふわっと浮かんでくるようです。また、方言を含んだ躍動的な会話文も魅力の1つ

と言えます。

このお話は小さな小学校に転校生が現れ、共に過ごし、去っていくまでを子供の目線で描いたものです。地元の子供たちは、自分たちとは違う異質な転校生を、伝説の風の精霊「風の又三郎」ではないかと噂し始めます。異質な者への興味と不安が入り混じった子供たちの心境や行動が丁寧に描かれており、自然と自分の子供の頃を思い出し、懐かしく思うことでしょう。彼は単なる転校生だったのか、「風の又三郎」だったのか、「風の又三郎」が転校生に憑依していたのか……様々な読み方ができるのもこのお話の面白いところです。心がほっこりする宮沢賢治の世界へ足を踏み入れてみませんか。（社会人：女）



木を植えた男



ジャン・ジオノ著
フレデリック・バック絵、寺岡襄訳
あすなる書房 1989



絵本の冒頭に記されている言葉。「人々のことを広く深く思いやる、すぐれた人格者の行いは長い年月をかけて見定めて、はじめてそれと知られるもの。

名誉も報酬ももとめない、まことにおくゆかしいその行いは、いつか必ず、見るもたしかなあかしを、地上にするし、のちの世の人びとにあまねく恵みをほどこすもの」献身的に働く人に読んでいただきたい作品です。20年以上に及び草稿作りを経て、1953年に書き上げられました。

故郷の荒れた地をもう一度、蘇らせたい。人々は集い、豊かな暮らしの実現を願い、不毛の地に弛まず小さな種を蒔き続けました。崇高な目標、無私、不屈の精神による行動力の素晴らしさが力強い言葉と美しい絵で表現されています。故郷をこよなく愛する情熱は時を経て、不毛の地を草木が生い茂り、花が咲き誇り、人々が集う幸せの地として蘇らせたのです。諦めず、行動を続ける尊さは後世の人々に幸を施す、という普遍的な真理を描いています。（社会人：女）

銀の匙

中勘助著
岩波書店（岩波文庫）1999



珠玉、という言葉がこれほど似合う作品は、そうないような気がします。語られる言葉、当時の情景、登場人物の心映え……何もかもが優しく、ゆったりとしていながら、愁いや鬱々とした思いも同時に胸に湧き上がってきます。

この作品には、特にストーリーというものはありません。思いついた時に、思いついた思い出を書いているように思えます。しかし、懐かしさと戻らない時間への切なさは、私たちに、さまざまな想いを抱かせてくれます。その想いの複雑さの分だけ、味わいも深いのです。ファーストフードが強い味でインパクト勝負、その時はおいしいけどいつまでも食べ続けられないのと対照的に、いつ食べても、いつまで食べても、新鮮に味わうことができる。そんな、美しい味わいを持った作品です。主人公の少年が見つけたのは、幼い頃、大事に育ててくれた伯母さんが薬を飲ませてくれた「銀の匙」。この銀の匙で、じっくり味わってみてはいかがでしょうか。（社会人：女）



クリスマス・キャロル

チャールズ・ディケンズ著、村岡花子訳
新潮社（新潮文庫）2011



ロンドンに一人で住む商人スクルージは、他人への愛情や思いやりがない、ケチでエゴイストな老人でした。あるクリスマスの前夜、スクルージは7年前に亡くなったたった一人の友人マーレイの亡霊が差し向けた三人の幽霊から、自分の過去、現在、未来（惨めな最後）の人生を見せられ、人間的な生き方の大切さに気づきます。それからのスクルージは、「誰からも愛されるよき友、よき主人、よき人になった。」と書かれていて、「人は一人で生きられない」、「人は人とのつながりで生きる」、「人と人はGive and Take」ということが強く感じられる物語です。

この本を読んでから、クリスマスにはその年に会った人達との出来事を思い出しながら、これからの自分について色々と考えようになりました。誰もがほのぼのとした気持ちになれるお話です。（社会人：男）



蝉しぐれ



藤沢周平著

文藝春秋（文春文庫）1991



藤沢周平氏の多くの作品の中でどれを推すべきか迷った末に、この作品を推しておきます。この作品は、青春小説としての部分も、折々の風景の描写も、剣で争う場面もバランス良く書き込まれています。藤沢氏の風景描写は、日本の湿気のある気候を反映した優しく美しいものです。この物語の始まりは、普請組の組屋敷の裏にある小さな清流で、主人公が夏の早朝に顔を洗う次の場面です。夜の名残の霧の漂う森に接した青い田圃を見回る遠くの村人の姿を眺めながら、主人公が、にいに蝉の声を聴いているゆっくりした時間。蛇に指先をかまれた隣の家の少女「ふく」の突然の悲鳴。緊張と緩和。ここから物語はリズム良くすべり出します。

同時代に藤沢周平という作家がいて、次の作品が出るのを楽しみに待てたことは、私にとって幸せなことでした。しかし、これからこの豊かな物語の世界に出会えるまだ読んでいないの方が、もっと幸運なのかも知れません。
（社会人：男）

チャリング・クロス街84番地

-書物を愛する人のための本-



ヘレーン・ハンフ編、江藤淳訳
中央公論新社（中公文庫）1984



「書物を愛する人のための本」という副題のこの本は、NYC在住の若い女性とロンドンにはチャリングクロス街にある絶版書専門店との書簡集です。本好きの著者と生真面目な店員ドエル氏とのやり取りは、淡々としつつもユーモアに溢れています。

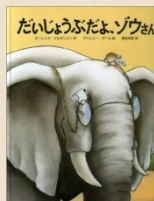
手紙の往復は1949年から20年間にも及びますが、その間二人は一度も顔を合わせることはありません。しかし、著者は戦後の英国の困窮振りに心を痛めて缶詰を送ったり、ドエル氏たちはそのお返しに刺繍のテーブルクロスを送ったりなど、心温まる交流が起こるのです。著者の送る発注本のリストは西洋古典から近代の有名小説までカバーし、当時の教養人の本棚を覗いている気分さえなります。江藤淳による美しい翻訳からは書物に対する江藤の愛が窺われ、「あの、右派論客のもう一つの顔が見えるのも一興です。そうそう、映画版でドエル氏を演じたのが名優アンソニー・ホプキンスであることも、追記に値するでしょう。
（社会人：男）

だいじょうぶだよ、ゾウさん

ローレン・ブルギニョン著

ヴァレリー・ダール絵、柳田邦男訳

文溪堂 2005



この絵本の読後感が子どもにも大人にも強い印象を与えるのは、その主題が生き物の死と深く結びついているからです。物語は歳老いたゾウと幼いネズミの仲の良い暮らしから始まるのですが、時が経ち老齢のゾウが死期を悟ると、とうとう吊り橋を渡って黄泉の国へ行こうとします。それをネズミが「いっちゃだめだ」と懸命に押し留めるのです。でも次第にゾウの本当の幸せを考えるようになったネズミは、最後には自ら吊り橋を修理して「こわがらないで」とゾウに声をかけると、「だいじょうぶだよ」と答えて去って行くゾウをそっと見送るのです。

この絵本が優れているのは、吊り橋を別れのクライマックスに設定した巧妙さと、それを翻訳した柳田邦男の優しさです。とりわけ『歳老いたゾウ』の原題を、『だいじょうぶだよ、ゾウさん』と日本語訳にした題名は絶妙な適訳です。（社会人：男）



寺田寅彦随筆集 第1巻



寺田寅彦著

岩波書店（岩波文庫）1963



「昭和年代の随筆として後生に遺る第一のもの」文豪内田百閒は寺田寅彦の文章をこのように評しました。寺田寅彦は日本を代表する物理学者であると同時に、名随筆家の顔も持ち合わせていました。「物理学者が随筆家？」と、この少し意外な組み合わせを不思議に思う方もいらっしゃるかもしれません。

この本に「科学者と芸術家」という随筆が収録されています。その中で科学者と芸術家は正反対の職業であるように見えて、実は多くの点で共通する部分を持つことを指摘しています。どちらの職業においても、観察力と分析的な頭脳、想像力、直観が必要だと述べ、また、芸術は主観的であり、科学は客観的であるとは限らないとも述べています。寺田寅彦はこの考えを見事に体現した人物だと思います。

文章の隅々にまでゆきわたった鋭い観察力と豊かな想像力、寺田寅彦が優れた科学者であると同時に、優れた芸術家でもあることが一読すればわかるはずで。 （学生：男）

動物農場



ジョージ・オーウェル著、高畠文夫訳
株式会社KADOKAWA（角川文庫）1995



人間に酷使されてきた農場の動物たちが、人間を追放するところからこの物語は始まります。それから動物たちはみな等しく、平和に暮らし始めました。そんな中、動物の中でも賢い豚が権力を握り、他の動物たちから搾取し、少しずつ自分たちに都合の良いように農場を変え始めます。賢くない動物たちは豚に言いくるめられ、人間に管理されていた時よりもひどい状況に追いやられていくのです。

これは動物を擬人化して、おとぎ話のようになっていますが、我々の現代社会にも十分あてはまる内容です。狡猾に権力を奪い、他人から搾取し、虐げることはどう考えても悪です。しかし、「難しいことは良くわからないから……」と考えることを止め、人任せにし、楽な方に逃げ、指示されることに慣れてしまった大衆にも問題がある、そう忠告されているように感じます。

一人一人が状況を見極め、考え、批判できる社会でなければ、いずれ「動物農場」になってしまうのではないのでしょうか。（社会人：女）

読書からはじまる



長田弘著

NHK出版（NHKライブラリー）2006



今や、パソコンやスマートフォンで、世界中の情報が手軽に大量に得られます。一日の生活を振り返れば、仕事は次から次へと暇になる時がなくて、学生だって日々の勉強や遊びに忙しい……。こんな情報の海の中、しかもスピードの速い世界に流されていると、本好きな人でも「読書は大事だ」って本当かなと、ふと心が揺らぐ時はありませんか。

この本は、読書のすすめというより、言葉をとて大切にしている詩人の長田さんが、「本を読む」ことについて色々な視点から、語りかけてくれるものです。例えば「子どもの本のちから」という章の中で、子どもの本というのは、子どものための本なのではなく、大人になってゆくために必要な本のことだ、と言っているところ。「そうだそうだ」と改めて思いました。読む人ごとに、読書について、納得や共感や気づきの言葉を見つかることができる本だと思います。心揺らぐあなたも、ちょっと手にとってみてください。（社会人：女）



読書の腕前

岡崎武志著

光文社（光文社知恵の森文庫）2014



時に、皆さんは本の置き場に難儀したことはありますか？私は図書館で本を借りるという習慣を殆ど持たなかったため、一人暮らしを始めてからは、読みたいと感じた本は風漬しに買い漁るといったことを繰り返して、悲しいかな、本の処理に困ると

いう事態から抜け出せずにおります。その上、物持ちの良い性格をしているのかどうかはわかりませんが、断捨離というのが非常に苦手でして、ほぼ本棚の肥やしになっているような本でも勿体無く感じてとっておく、なんてことを続けていた結果、本棚が足りなくなるという事件が発生してしまいました。

この本では、私と同じように本を沢山買い込んだ人の本の処理方法がいくつか紹介されており、また、未読の本を如何にして処理するかというマニュアルにもなっております。読書に興味を持ち始めた人へ、それを後押しするため、また私と同じ失敗をしないようにするために是非進めたい本であると私は感じました。（学生：男）

場所

瀬戸内寂聴著

新潮社（新潮文庫）2004



「人は誰も過ぎ去り、時は確実に通り過ぎてゆく。けれども、人の足の立った場所だけは、土地の記憶をかかえたまま、いつまでも遺（のこ）りつづけていくようだ。（『場所』：油小路三条の章より）」

作者・瀬戸内寂聴はこの作品の中で、自分が通り過ぎてきた「場所」、そして「時間」、何よりも「愛した人たち」を振り返る旅に出ます。

私が繰り返し読んだ箇所は、「眉山」の章です。家庭を持っているのに、恋人の涼太と会うために自転車を漕ぐ「私」。ただ10分間見つけ合うための逢引の場に選ばれた「眉山」は、きっと「私」にとって特別な「場所」だったのでしょうか。さまざまな記憶を振り返る作者の筆はさえぐえと進み、読者をその「場所」へ軽やかに連れてゆきます。力のありあまる作者が、もの凄い体験を清らかにえがききつた、まさに傑作と言える作品です。第54回野間文芸賞受賞。ぜひ一読を。（社会人：女）

北條民雄 小説随筆書簡集



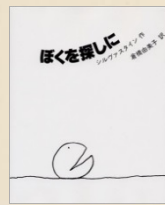
北條民雄著

講談社（講談社文芸文庫）2015

「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです」。当時不治の病と恐れられたハンセン病を発病した青年が、隔離病院に入院した最初の一夜を描いた小説「いのちの初夜」（1936年）は文壇と世間に衝撃を与えました。作者は北條民雄。19歳の時ハンセン病を発症した北條は、死ぬしかないと考えて何度も自殺を試みますが、どうしても死ねない。死にたいのに死ねない、極限の状況で文学に縋り付き、院内から川端康成に「作品を見てほしい」と手紙を送りました。21歳のとき「いのちの初夜」を発表し、大絶賛を浴びますが、作家として活躍し始めて間もなく、無理な執筆がたまって23歳で亡くなります。本書は、北條がわずか3年の間に書いた小説、随筆に加え、未完成原稿や師・川端との往復書簡などを収録しています。小説とあわせて随筆や書簡を読むことで、死の淵で「いのち」の美しさを描き出した作家の魂により深くふれることができます。（社会人：男）

ぼくを探しに

シェル・シルヴァスタイン著、倉橋由美子訳
講談社 1979



「何か足りない それでぼくは楽しくない 足りないかけらを探しに行く」と始まるこの絵本の邦題は「ぼくを探しに」ですが、「ぼく」が探しに行くのは、世界のどこにもありはしない「本当の自分」などではなく、自分に足りないが故に不幸せになっていると信じる「かけら」です。「ぼく」はついに「かけら」に出会います。しかし……。興味をもたれた方は、衝撃の結末をご覧ください。シンプルな線で描かれた「かけら」たちが何を寓意するのは、読み手それぞれの解釈に委ねましょう。それでも、誰しもが己の人生や幸せのカタチについてじっと考えてしまうに違いありません。そして、「かけら」はその後……。続編「ビッグ・オーとの出会い」では、更なる驚愕が待っています。10代で読めば意表を突かれ、30代なら新たな感慨をもち、50代であればまた別の味わいが楽しめるでしょう。倉橋由美子訳の本書だけでなく、平易な英語で書かれた原書を読むのもお勧めです。（社会人：男）

本の運命



井上ひさし著

文藝春秋（文春文庫）2000

井上ひさし
本の運命



「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」井上ひさしさんが創作のモットーとしている言葉です。

この作品はまさにモットー通り。

生い立ち、井上流の本の読み方、子どもを本好きにするためには等、大切なことをさらりと表現していますが、言葉はじんじんと心に響いてきます。

人と本との出会いについての描写はとりわけ感動的です。当時、蔵書が96冊しかない故郷の図書館に、自身の本13万冊を贈った際のことを「本との出会いは「一期一会」みたいなのところがあるね」「図書館に行くと、本が耀いています。～中略～それらが本棚にちゃんと収まってずらっと並ぶと、たしかに本が喜んでるんですね。やはり本というのは、必要な人の手に取られることが一番幸せなんです」と述べています。

本と読者が出会う時、良き方向へと新たな運命は開かれていく……人間の歴史総体が真心をこめて作ってきた本。人と共に本の運命も受け継がれていく希望を見出せます。（社会人：女）

忘れられた日本人



宮本常一著

岩波書店（岩波文庫）1984



民俗学者であった著者が、日本各地をくまなく歩き、老人たちの生きざまを綴った本書は、「昔」とは一体何だろうか、どこからが昔なのだろうか、そんなことを考えさせられる一冊です。本書のエピソードの中には、幕末の長州征伐や戊辰戦争が、語り部の経験や伝聞として登場します。かと思えば、テレビを買ってくれとせがむ子供の話だって出てきます。その「幕末」から「テレビ」までの時間が、教科書に載るような、偉い人の残した文書ではなく、ひたすら地方の老人の語りによってつながれていく様は実に見事です。もちろんかつての生活の記録や考察と言った学術的魅力も高いのですが、幕末以前に、明治、大正に、昭和、そして現代にいたる連続した時間の中で、「そこにたしかに人がいたこと」をこれほど鮮やかに感じさせる文章は、ちょっと他では見られません。優れた紀行文として、折に触れて開きたくなる一冊です。（学生：男）



あのころはフリードリヒがいた

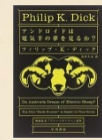
ハンス・ペーター・リヒター著、上田真而子訳
岩波書店（岩波少年文庫）2000



戦後70年、体験者が減少する中で、戦争をどう伝えるのかは難しい問題です。これは1925年生まれのドイツ人、リヒターが、自分と同じアパートに住んでいた同い年のユダヤ人少年、フリードリヒとの間に起きたことを綴ったノンフィクション作品です。年代に沿って淡々と語られるだけに、少年たちの心情や家庭の様子、全体主義へと傾いてゆく街の狂気がより一層強く伝わります。そして戦争が為政者の命令だけで起こるのではなく、人々の心の中にある差別感や優越感、疎外感によって邁進することに気づかされます。ヤング・アダルトに分類される作品ですが、詳細な添付資料（年譜、ユダヤ教に関する注釈）を含め、大人にも充分読み応えのある一冊です。（社会人：女）

アンドロイドは電気羊の夢を見るか？

フィリップ・K・ディック著、浅倉久志訳
早川書房（ハヤカワ文庫 SF）1977



フィリップ・K・ディックには、この作品以外にも、自分が何者かというアイデンティティーにこだわり、見ている「現実」のもろさをテーマにしたものが多くあります。この作品では、感情移入の能力の有無が、外見上は人間そっくりなアンドロイドと人を隔てるものとして提起されています。主人公が冷え切った夫婦関係に疲れ、自分は人間であるというアイデンティティーも揺らぎ、アンドロイド狩りというタフな任務にも疲れ切った最後の場は、題名と深く絡んだ部分です。この悲観的なディストピアの物語のラストは、主人公が見つけた「生き物」をきっかけにして、夫婦関係の再生を予感させる実に優しいものになっています。（社会人：男）



イタリア・トスカーナの優雅な食卓



宮本美智子著
草思社 1994



この本は、著者の一家がトスカーナの貴族、ボナコッシ伯爵の所有するヴィラで数週間を過ごすエッセイです。貴族、というと贅沢な暮らしを思い浮かべるかも知れませんが、伯爵は、基本的に自給自足の生活をしています。そこで作られるのは、みずみずしい野菜、生ハム、ジャム、ワイン、オリーブオイル……。これらの美味しそうなことと言ったら！そしてこの本の魅力はもう一つ。著者が行く先々で出会う、ルネッサンスの絵画そのままのような風景です。これは残ったのではなく、伯爵のような人々が手をかけて残してきた風景なのだそうです。この本を読むと不思議と心が満たされてくるのは、そういった暮らしが持つ豊かさのせいかも知れません。（社会人：女）

隠居の日向ぼっこ



杉浦日向子著
新潮社（新潮文庫）2008

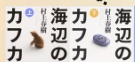


「長時間文字を追うことが辛くなってきた」「まとまった時間が取れない」「字を読む習慣なんてない」……そんな方々におススメしたい本書は、180ページの中に、たった2ページのお話が50も入っている、掌編エッセイ集となっています。それぞれの小話では「浮世絵」や「お歯黒」、「耳搔き」や「団扇」など、江戸時代の四季折々の習俗や、今でも使う身近なものが取り上げられ、ひらがなのバランスが心地よい、軽妙な文章で語られています。言葉の端々には著者の「昔ながらのよさ」への愛がにじみ出ています。そこには忙しい現代人に向けた、生活のヒントが隠されているかもしれません。漫画家である著者の、どこか味のある挿絵も魅力の一つです。（学生：男）

海辺のカフカ（上・下）



村上春樹著
新潮社（新潮文庫）2005



少年は父が言った呪いの運命から逃れるため、家出してある図書館を目指します。一方、猫の言葉が分かる奇妙な老人も猫殺しの犯人を見つけた後、何かに導かれるように同じ場所を目指します。物語は主にこの二人の話が交互に語られ、やがてシンクロしていきます。この小説では四国の森や図書館が舞台になっており、随所にでてきます。また、比喩的表現や慎重に語られるセリフから、背景や象徴しているものを考えて読むことも、多感な少年の性の露露や大人の暴力について描かれた小説として読むこともできます。死から感じる諦念とともに元の場所へ帰る少年からは、現実世界で生きていく活力を感じる事ができる作品です。（社会人：女）

オー・ヘンリー傑作選

オー・ヘンリー著、大津栄一郎訳
岩波書店（岩波文庫）1979



歯切れのいい文章、スピーディな展開、そしてあっと驚くラスト。これらが私の思うオー・ヘンリーの魅力です。彼は今から約150年前の作家ですが、その文章は全く古臭さを感じさせず、私たち現代人にも自然と馴染みます。この傑作選では、彼が書いた全272篇の短編の中から20篇が選ばれています。心温まるお話からピリリと皮肉の効いたお話まで、さまざまなジャンルの短編を楽しむことができます。いずれもラストまで目が離せないでしょう。それぞれ、短くも味わい深いお話です。忙しい毎日を送っている方、最近刺激が足りないなと思っている方、さまざまな方々にぜひ読んでいただきたい一冊です。（社会人：女）

風立ちぬ

※ 青空文庫あり

堀辰雄著

角川春樹事務所（ハルキ文庫）2012



高校の国語教科書に載っていた『浄瑠璃寺の春』を読んでから、堀辰雄に魅了され『風立ちぬ』を耽読しました。近頃は宮崎駿さんのアニメの影響で、『風立ちぬ』の話をすると「ああ飛行機の話ね!」と言われますが、堀辰雄の原作に「飛行機」は出てきません。高原のサナトリウム（結核療養所）に入院した婚約者に付き添って暮らす話で、自らの体験をもとに、愛する人の病や死にどう向き合うかを問いかけています。

「愛、死、生」という重苦しい題材の物語ですが、思いのほか爽やかさで、明るささえ感じられるのは、堀辰雄の巧みな情景描写にあるのでしょうか。読むほどに「生きる」ことの大切さを考えさせられます。

（社会人：男）



復刻版 死線を越えて

賀川豊彦著

PHP研究所 2009



徳島ゆかりの世界的な社会運動家・賀川豊彦の自伝的小説で、大正時代に大ベストセラーとなりました。当時、作者自身が実践した貧民救済活動を元に、社会の隠された現実を描きだしています。主人公は徳島から神戸に移り、そこの貧民窟（スラム）に腰を据え、救済活動を始めました。やがて社会の消費システムを変えなくては貧民問題の解決はないと考えようになり、消費組合の結成や無料診療所の開設を行う。その最底辺での必死の活動を通して、いつしか彼は、真の生き方に目覚めていきます……。いまや忘れられた幻の作品、しかし社会問題が山積みの現代でこそ、再読の価値があるのでは。文学作品としても、生き生きとした魅力的な小説です。（社会人：男）



孤愁-サウダーデ

新田次郎・藤原正彦著
文藝春秋（文春文庫）2015



残された9冊の取材ノートを手し、父・新田次郎の絶筆を、数学者であり、エッセイストである次男・藤原正彦が追体験し、32年後に刊行した世界でも類を見ない親子合作小説です。徳島市で晩年を過ごし、徳島を海外に紹介したポルトガル外交官モラエスを描いています。孤愁の海を泳ぐことがポルトガル人の宿命であるならば、最愛のおよねの眠る墓守をして静かに暮らした徳島の日々は「サウダーデ」そのものであり、心は満ち足りていたと思います。

あとがきには「父の書いたであろうように」書くことはできなかったけれど、父が全力で書いたものを受け、私も全力で書いた作品であると書かれています。父と息子、それぞれの孤愁を感じてください。

（社会人：男）

萩原朔太郎詩集

萩原朔太郎著

岩波書店（岩波文庫）1981



初めてふれた朔太郎の詩は、高校の教科書に載っていた『風船乗りの夢』だったかと思っています。「酔ひどれの見る美しい幻想（まぼろし）も消えてしまった。」という一節には、こんなにも素敵な言葉遣いが日本語にあったのか、と感動させられたものです。日本近代詩の代表的詩人である朔太郎ですが、その詩の魅力は、必ずしも洗練されてはいない、繊細ながらも直球の美しさにあります。そこには感情をそのまま文字にして殴りつけたような、エネルギーの塊のような「カッコよさ」があって、それは時に作者本人の意思を超えた、言葉自身のもつ呪術的な力をも感じさせます。表現行為について言及した『月に吠える』の序文も名文です。（学生：男）

ボラード病

吉村萬巻著

文藝春秋 2014



主人公・大栗恭子が20年前の小学生時代を回想します。彼女が暮らしていたのは、住民がふるさとを誇りに思い、それぞれの絆が非常に強い海塚市。しかし恭子の母は海塚の人や海産物、農作物を非常に恐れています。どこか不気味な世界が、少女のミクロな視点から少しずつ明らかになっていきます。

読者である私は作品の中で視野が広がるにつれ、震災後の日本、また世界のさまざまな悲劇の普遍的な問題を想起し、現実の社会に義憤を募らせていきました。最終章、現在の恭子による独白は息をつく間もなく読まされ、最後の一文で絶句しました。作品世界を鳥瞰していた私は、地の底に叩きつけられました。未だその一文に対する答えは見つかっていません。（社会人：男）

『徳島読書人が選ぶ最高の31冊』

2016年3月31日 初版第1刷発行

企画・編集：依岡隆児(代表)、真壁和裕、

片山真一、佐々木奈三江、亀岡由佳

発行：平成27年度 徳島大学総合科学部 学部長裁量経費
地域交流プロジェクト「徳島における読書
コミュニケーション文化育成プロジェクト」

印刷：教育出版センター